

「女に道を聞くな」考

—説明文のわかりやすさについて—

小林 美恵子

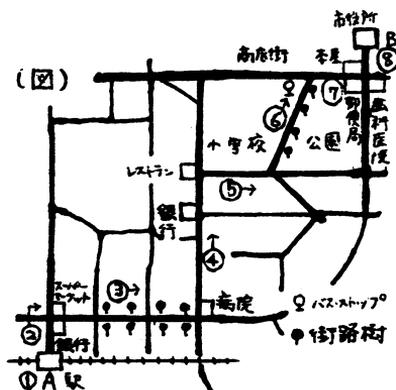
1. はじめに —調査の目的と方法—

女としての日常は、男のそれとは違った体験をしばしば女自身にもらす。例えば「女は論理的ではない—女は方向音痴だ—だから女に道を聞くな。」こんな言葉を男、或いは女からも受け、または自身でさえつぶやいた経験を多くの女は持っている筈だ。男にとっては自分と関わりのない批評にすぎぬ言葉も、女にとっては好むと好まざるとにかかわらず、自らを振り返りされ、場合によっては立ち向かわざるを得ぬものとして、女の生活には立ちほだかる。

果たして本当に女は道を説明することが苦手なのだろうか。もしそうなのだとすれば、それは何故なのだろうか。1つの小さな調査により確かめてみることにした。

まず男女各20名の高校生に1枚の地図(図参照)を示し、指定した地点A～Bの道順を①～⑧に従って記述説明させる。(調査Ⅰ)この場合40名という人数はいささか少ないが、これは次に述べる調査Ⅱを行う上で事実上可能な人数の限界であった。

なお、この40名は1校の生徒であるが、その中では無作為に抽出し、成績等の片寄りを避けた。また記述に与える時間は15分程度とし、特に推蔽をさせないようにした。このような調査はできれば話し言葉で行いたい。しかし、これも個人で行う調査では実現が難しい。そこでやむを得ず



書いたものによったのだが、できる限り、生の思考が推蔽による考え直しなどを経ずに文章に現れるようにと考えたのである。

次に調査Ⅰの40篇の筆者を伏せ、性別もわからぬように配慮した上で、これを各5人の高校生及び大学卒の社会人、即ち計10名に読んでもらい、

(1) 文章を読み、A地点のみ指示した白地図に順路を記入できるか。

—できれば1点(5点満点)

(2) 読んでみてわかりやすいか。

—わかりやすい2点、ふつう1点、わかりにくい0点(20点満点)

(3) (1)(2)の根拠を記す。

の3項目にわたり評価をしてもらった。この場合、高校生については1人11篇を原則とし、のべ200人に調査をしたが、社会人の場合これが困難なので、5人の方にそれぞれ40篇全てを読んで評価してもらうことにした。このとき評価の(1)は除いた。従って一篇については25点が満点ということになった。

なお、この場合読み手側の理解能力により結果に差が出ることも考えられるが、社会人について、両性を含み(男2、女3)学歴を大学卒以上と揃えた他(注1)は、文章内容も単純ではあるし、この調査では特に理解能力を問題としないことにする。なお高校生については評価者200名中79名が男性であったが1篇ごとの評価者については男女を均等に割ふるということではしなかった。

2. わかりやすさの判定結果と理由

男性の文章、女性の文章それぞれに与えられた評点の平均は男性14.6、女性12.2であった。またわかりやすさについて、上位の評価をされたもの10篇の男女比は8:2であったが、下位10篇では4:6と女性の割合が高くなった。つまり、男性の道順説明の文章は概して女性のものよりわかりやすいという評価が下されたといつてよい。「女に道を聞くな」ということは全く無意味な偏見ではなかったようである。

これは何故なのだろうか。(3)であげられた評価の根拠を整理することにより考えてみたい。それぞれの根拠と、それが与えられた文章の書き手の性別を表わしたのが表1である。なお1篇につき何種類かの批判を受けた例もあるので、全体の数は40篇を越えている。

表 1

(数字の単位は篇)

わかりやすさの根拠	男 / 20	女 / 20	計
くわしい	4	3	7
目印のあげ方がよい	5	1	6
左右が明確である	1	1	1
文が短い	2	0	2
その他(要領がよい。具体的である。単純である)	1	2	3
わかりにくさの根拠			
しつこい。ややこしい。 こまかすぎる。くどい。	2	3	5
文が多すぎる	1	0	1
説明不足(もっとくわしく)	4	3	7
まちがいがあある	1	1	2
語が不適當 (まっすぐ。すこし。すぐ)	0	3	3
距離は不要	2	3	5
目印が悪い	0	1	1
まとまりが悪い	0	1	1

表1で特にわかりやすさの男女差にかかわると考えられるのは、目印をいかに記述するかということや、不適當な語—「すこし」「すぐ」「まっすぐ」等。「すこし」とはどのくらいなのか、「すぐ」とは……という曖昧性の問題であろうか—である。

ところでこれらについて考える以前に考えねばならないのは「くわしさ」とわかりやすさの関係ではなからうか。「くわしくてわかりやすい」という評価には「説明不足」という評価が対置されるし、「くわしさ」の質によっては「ややこしい」「くどい」というような判断をされることもあり得る。その意味で、これらの批評はその判断の根拠を同じくするものであるといえようし、これらのいずれかの評価を実際に受けた文章が半数の20篇にも上るということから「くわしさ」とわかりやすさの関係を考えておくことは無意味ではないだろう。

3. 「くわしき」とわかりやすさ

「くわしい」とはどういうことか。ごく普通に考えれば、ある事象を説明するのに、その微細な部分にまで言及する、従ってことば数を多く説明することだといってよいだろう。これは結果として文章の長さにかかわってくる。表1に現れたように「くわしき」とわかりやすさとの間になんらかの関係があるとすれば、考えられるのは、わかりやすさが、伝えられる情報の質のみならず情報の量＝文章の長さにも現れるだろうということである。特にこの調査のように伝えるべき同一内容の事象をもつ文章群においては、それをどの程度の長さにまとめるかということがわかりやすさに大きくかかわってくると考えられる。もちろん、これは単に文章が長いからわかりやすいとかわかりにくいとかいうことではない。伝えるべき内容に対して適切な長さもあるのかもしれないということが表1からも明らかである。

さて、このように考えて、男女の文章のそれぞれの文節数を測定してみた。その平均値は男47.4、女56.2で女性の文章の方が男性よりも長いことがわかった。(注2)なお男性の文章では20篇中17篇が59文節以下であるのに対し、女性のものでは11篇だけであるという事実も女性の文章が長いことを示している。

但し、この結果から女性の文章のわかりにくさは男性の文章より長いことによると断ずるのは危険である。文節数ごとに、その与えられた評価の平均と対応させ、比較したのが表2である。

表2 1文章中の文節数とわかりやすさ

	文節数	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	80~89	90~	平均
女	A	3	4	4	4	3	1	1	56.2
	B	11.7	10.0	15.0	13.3	11.7	14.0	6.0	12.2
男	A	6	6	5	2	0	1	0	47.4
	B	11.5	15.5	15.8	17		17		14.6
計	A	9	10	9	6	3	2	1	51.8
	B	11.6	13.3	15.4	14.5	11.7	15.5	6	13.4

A…該当する文章数 B…わかりやすさの評価平均

なお平均は、それぞれ左の数字を平均したのではなく全体から割出した平均値である。即ち女性の文章の文節数の平均が56.2、わかりやすさの平均が12.2というふうに見る。

この表の結果からはっきりいえることは、この程度の情報内容を伝える文章では30～39文節では説明が十分にはできないのであろうということと、90文節以上も費やすことはわかりにくさにつながるようだという事、せいぜいこの2つにすぎない。一応50～59文節あたりにわかりやすさのピークがあるともいえるが、これも特に男性の場合がそうであるように例外が多すぎる。文節数の平均値は女性の場合、まさに50～59文節の中にあり、この範囲からはずれている男性の文章の方がわかりやすいということであれば、この50～59文節という数字はますます意味をなさないのである。

しかし、いずれにしろここではっきりしたのは女性の文章が男性の文章より長いということである。それは文章の性質を決定する上で何らかの意味をもつはずである。そこで、文章の長さについて次のような視点からさらに細かくみていくことにした。

- (1) 文章を構成する要素としての文論的考察
 - (2) 文章を構成する意味、内容からの考察
- 次にその一々について述べる。

4. 文章を構成する要素としての文

一般に文章のわかりやすさについて語られるとき、しばしば言及されるのは文章の長さそのものより文の長さについてである。

文章のわかりやすさの尺度についてはデール、チャールの公式、フレッシュの公式(注3)をはじめ波多野完治氏(注4)樺島忠夫氏(注5)らによって説かれたものがある。これらはいずれも1文の長さを平易さの条件として数え、さらに語の性質(親和語か不親和語(注6)か等…)漢字の量、比喩量、句読点の打ち方などにより、わかりやすさ、読みやすさを考えたものである。そしてこれらを含め、一般に文の長さが問題となるときは、短かすぎることでなく、長すぎる事が問題とされている。

ところで以上の諸説における「わかりやすさ」は表現内容にかかわる——むしろ文章の性質であるとみるべきものである。それは語の難易性や漢字、比喩等を問題とすることからも明らかである。しかし同一の事象、内容を表現する文章であっても、そのわかりやすさは必ずしも同一ではない。しかも本調査の対象とした40篇はまさにそのようなわかりやすさの差異をもつ文章である。この場合はそれらのわかりやすさを決定しているのは何か。それは

1文の長さなのだろうか。文章の長さは、ある長さをもつ文がいくつか重なることにより決まるわけだが、その重なり具合が問題なのだろうか。これらを考えるために、

(1) 1文章中に含まれる文の数(表3)

(2) 1文あたりの字数(表4)

を調べてみた。

表3 1文章中に含まれる文の数

	文数	1~2	3~4	5~6	7~8	9~10	11~12	平均
女	A	4	4	4	6	0	2	5.4
	B	11.0	10.8	14.0	13.3		10.0	12.2
男	A	7	4	7	2	0	0	3.8
	B	8.9	18.0	15.2	19.0			14.6
計	A	11	8	11	8	0	2	4.6
	B	10.8	14.4	14.8	14.8		10	13.4

A…該当する文章数

B…わかりやすさの評価平均

平均については(表2)に同

表4 1文あたりの字数 (平均 女…33.7 男…40.3 全体…36.5)

1文の字数	全 体			わかりやすさ上位10人			わかりやすさ下位10人		
	1~26	27~43	44~	1~26	27~43	44~	1~26	27~43	44~
女 { 該当する文数	43 (0.42)	36 (0.35)	23 (0.23)	30 (0.52)	17 (0.30)	10 (0.18)	13 (0.30)	19 (0.42)	13 (0.29)
男 { 該当する文数	27 (0.36)	29 (0.38)	20 (0.26)	17 (0.35)	9 (0.40)	12 (0.25)	10 (0.36)	10 (0.36)	8 (0.29)
全体 { 該当する文数	70 (0.39)	65 (0.37)	43 (0.24)	20 (0.39)	23 (0.45)	8 (0.16)	7 (0.20)	14 (0.40)	14 (0.40)

()内は割合。但し横列についてのものである。

「全体」の上位10人、下位10人は男女を含む。そのうちわけについては、2.「わかりやすさの判定結果と理由」参照。以下の調査においてもこれは同様である。

まず1文章中に含まれる文数であるが、文節数の場合と同様に、この結果からいえることは、1文ないし2文のもの、11文ないし12文のものはわかりにくいというにとどまる。特に1文のものは少なくとも30~39文節を
れ目なしに綴っているわけで、これは文としてかなり長いものになる。なお男女差についてみれば、1~2文の文章が男性の場合女性の倍もあること、しかも評価の平均がこの文数に限っては、女性の方が高いことに注目すべきである。

次に1文あたりの字数について述べる。表4は40篇に含まれた全文(男性76文、女性102文)を字数によって分類したものである。字数については樺島忠夫氏の分類(注7)によった。

この表によれば、1文章中の文数においても文節数においても男性よりも多い女性が、それ故か、文の長さという点ではむしろ男性より短いことがわかる。全体ではそれほど大きな差異ではないが、わかりやすさの評価について上位10位、下位10位をそれぞれとったものについてはこの傾向はさらに大きい。女性の文章がわかりにくいのは、1文の長さの長いことが原因ではないのである。

但し、文の長さはわかりやすさと無関係ということではない。40篇のうちのわかりやすさについてそれぞれ上位、下位を比べた場合、44字以上の文と1~26字の文との割合がほとんど逆転している。つまり1文の長さのあまりに長いものは明らかにわかりにくいという評価を受けているのである。

このことはさらに次の「行きづまり文」の長さの調査でもはっきりいえる。ここでいう「行きづまり文」とは白地図上への順路記入に際して5人のうち1人以上が行きづまった箇所の文を指すこととする。(注8)行きづまり文の平均字数についても、またその文章中で最長である文の、行きづまり文のうちにしめる割合からみても、行きづまり文が平均より長い文であることがわかる。(表5)

さて、行きづまり文に見る男女差であるが、これはほとんどないといっ
よいのではないだろうか。わずかにこのような文の出現率が男性の方が高い
といえそうだが(女性17文/102文…12%、男性14文/76文…18%)
これも白地図への記入時に、もし説明のはじめの方で行きづまるとそれ以後
の文章は読まれないということ等から、述べるに足る差とはいえないと考

える。

表 5 「行きづまり文」の長さ

1文の字数	1~26	27~43	44~	計	平均字数	最長文※
女(該当する文数)	2 (0.12)	5 (0.29)	10 (0.59)	17	54.9	9/17 (0.53)
男(該当する文数)	2 (0.14)	4 (0.29)	8 (0.57)	14	70.3	9/14 (0.64)
全体(該当する文数)	4 (0.13)	9 (0.29)	18 (0.58)	31	61.8	18/31 (0.58)

※最長文とは、1文章中最も字数の多い文とする。女性では17の「行きづまり文」のうち9が、その含まれる文章中最長の文であったということになる。

なお樺島忠夫氏は、文はただ長いことが問題なのではなく、どのような長かが問題であるとされる。即ち、氏によれば「つなぎの長い文」(注9)——いくつかのつながれた形をもつ文の場合は長くても問題にならないが、1つの文が他の文の部分となって合成された「構造の複雑な文」(注10)についてはいくつかの部分に分解して述べる必要があるとされる。これを調査してみたのが表6である。この表には、文が長くなればなるほどそのうちの「構造の複雑な文」の割合がふえること、さらに「構造の複雑な文」の方が「つなぎの長い文」よりそのうちにしめる行きづまり文の割合が高くなるということがはっきりとあらわれ、樺島氏の説を裏付けている。また、これについては男女差の面からみると非常に興味深い。即ち男性は女性に比して「構造の複雑な文」を多く書いているが、これに行きづまり文の現れることに関しては女性より少ないのである。

表 6 文構造とわかりやすさ

字数 構造	女				男				全 体			
	1~26	27~43	44~	計	1~26	27~43	44~	計	1~26	27~43	44~	計
つなぎの長い文	40	32	14	86	22	22	10	54	62	54	24	140
(うち行きづまり文)	(2)	(4)	(5)	(11)	(1)	(3)	(4)	(8)	(3)	(7)	(9)	(19)
構造の複雑な文	3	4	9	16	5	7	10	22	8	11	19	38
(うち行きづまり文)	(0)	(1)	(5)	(6)	(1)	(1)	(4)	(6)	(1)	(2)	(9)	(12)

以上の4調査から、文章のわかりやすさが諸説通り文の長さとかかなり密接な関係にあることがわかる。少なくともわかりやすい文章を書くためには、極端に長い文を避けた方がいいということははっきりいえる。また「構造の複雑な文」をいかにまとめるかということもわかりやすさに大きく寄与するであろう。

しかし、これを男女差という視点からみたとき、以上の調査からは文の長さや評価の差の関係を見出すことはむずかしい。男性の文章は平均して1文の長さが長く、複雑な構造の文が多いなどわかりやすさにとってはマイナス的要素をもちながら、しかし女性より高い評価を受けているのである。これは男女各数が全体のさらに半数ずつになってしまうという調査対象の文章数の少なさもその1つの原因といえるかもしれない。が、いずれにしろ文章を形づくる形式としての文はわかりやすさの男女差を産み出すというふうには働いていない。そこで私は再び男女の文節数の差に戻り、その差がどんな原因によって生まれているかを意味・内容の面から探ってみることにしたい。

5. 文章を構成する意味・内容からの考察

文章の長短を構成する内容的な要素を調べるために、調査に用いた説明文の内容を次の(1)~(4)に分け、各々がどの程度文章中に現れるかを調べた。

(分類)

- (1) 行動—新しい方向を選択するためにとる行動の記述
ex、右へまがる 右へ行く 右折する
- (2) 地点—「行動」をおこす地点の記述
ex、2つ目の角で(右へまがる)病院のところで(右へまがる)
- (3) 過程—前の「行動」から次の「行動」をおこす「地点」に至る直進の部分の記述
ex、まっすぐ行き(2つ目の角で右へ…)そのまま進み(病院のところで右へ…)
- (4) てがかり—目印を含み、進む道にかかわって、進む人の行動にかかわらないものをこう定義する。即ち「十字路を横切って進む」の「十字路」などはいわゆる目印とはいいいにくい、この「手がかり」のうちにかぞえる。

手がかりについてはさらに

(a) 地点を示す主たる方法として

ex 病院のところで右へまがる

(b) 地点を示す補助的な方法として

ex 3つ目の角には病院があるので、そこをまがる

(c) 過程に関してつかわれる

ex 銀行、レストランと通りすぎて、十字路へ出たら右へ…

(d) 行動の方向を示す

ex 小学校の方にまがる

のような分類が可能であろう。

なお、以上の(1)～(4)はあくまでも意味上のこととして考えた。例えば、

病院の前まで行き、右折する

というとき「病院の前まで行き」は形式の上からは直進する部分の記述となるが、これは意味上からは「地点」を示している。そこでそのように分類も行った。同様に、

まっすぐいったところの銀行の角を右折する

で、「まっすぐいったところ」は形式的には「地点」を示すが、意味の上からは「過程」の記述とした。

なお、このような意味上の分類を行うときに「そこで」等指示語をどのように扱うかも問題となるが、これについては独立して「地点」を表すものとした。即ち、

ex1 病院の前まで行き右折する

ex2 病院の前まで行き、そこで右折する

というとき、同じ「病院の前まで行き」をex1では「地点」そのものの記述であり、ex2では地点を示す補助的な方法としての「手がかり」の記述であるとした。これは「そこで」という指示語の存在を明確にするためである。

さて、このように分類した(1)～(4)が文章中にどのような割合で含まれているかを文節数で示したのが表7である。この場合「手がかり」を(b)のみにしたのは、(a)(b)(c)がそれぞれ「地点」「過程」「行動」の記述と不可分で数として抽出するのがむずかしかったことによる。

この表から、文節数の男女差はそのちようど半分を「過程」の記述がしめ

ていることがわかる。またそれについて「手がかり」の量も男女差をつくる大きな要素である。これはある意味で当然のことで——即ち、極端に言えば全ての道順は「行動」と「地点」の記述のみで表わせるのである——単なる文節量よりも、これらがいかに現れるかが問題となる。

表7 内容構成の要素

		①行 動	(2)地 点	(3)過 程	(4)手がかり(b)
女	A	11.3	18.8	13.4	12.8
	B	0	7	4	4
	C	5	0	7	8
	D	15-7 8	25-14 9	33-2 31	35-0 35
男	A'	11.0	17.1	8.9	10.3
	B'	0	4	1	1
	C'	6	1	13	8
	D'	14-7 7	29-8 21	26-0 26	33-0 33
差	A-A'	0.3	1.7	4.5	2.5
上位 10人	A	12.3	16.5	13.8	12.8
下位 10人	A'	10.9	17.8	10.4	12.4
差	A-A'	1.4	-1.3	3.4	0.4

A…各要素をあらわす文節数の平均

B…文節数が20以上ある文の数

C…同じく10以下の文の数

D…最も大きい文節数-最も小さい文節数

さて、ここで前述の各要素がどのように現れるかを整理し、次のように分類した。

(記述の型の分類)

(α) 「地点」+「行動」

(α') 「手がかり」+「地点」+「行動」

(β) 「過程」+「地点」+「行動」

(β') 「過程」+「手がかり」+「地点」+「行動」

まず「地点」+「行動」の記述(α)を基本に地点を示す「手がかり」記述のあるものを(α') さらに「過程」の記述のあるものを(β)、(β')としてみたのである。つまり「手がかり」記述型=ダッシュ型、「過程」記述型= β 型となる。これらの現れ方は表8の通りである。

表8 記述の型の分類

	α	α'	(α 型)	β	β'	(β 型)	その他	$\alpha'+\beta'$ = 手がかり
女	43	19	(62)	38	32	(70)	20	51
男	56	30	(83)	28	23	(51)	16	53
上位 10人	25	11	(37)	14	19	(21)	5	30
下位 10人	26	5	(31)	18	16	(34)	9	21

この表は、道順を曲り角ごとに8部分にわけ(前掲図参照)部分ごとの記述の型を調べた結果をまとめたものであり、文単位で考えたものではない。この表において数値が高いということは、それについての記述の箇所が多いということである。

この結果からは、女性およびわかりやすさにおいて下位10位の者について、 β 型の記述が多いことがはっきりわかる。表7と比してみると、上位者、下位者については、表7の場合、上位者の方が「過程」の記述量(文節数)は多い。しかし記述の箇所数では逆に下位者のものの方がずっと多くなっているのである。また女性の場合、箇所数においても、それぞれの箇所の記述量でも男性に比べると多い。

女性や、わかりにくい文章を書いた者について、考えられるのは1箇所ごとの記述量はどうであれ、全ての曲り角ごとに「まっすぐすみ」「〇〇にそってずっと行くと…」というような「過程」の記述が行われているようであること、そしてそれは勿論わかりやすい文章を書くためには避けた方がよいということである。男性と女性のそれぞれの文章のわかりやすさの意味をようやくここでおぼろげながら見ることができたといえよう。

一方「地点」を示す「手がかり」であるが、表8よりその箇所数については男女差のほとんどないことがわかる。これは何を意味するか。表7の文節量の差については「手がかり」記述は平均2.5文節女性の方が多かったわけ

であるから、1箇所毎の記述量も女性は男性より多いということになる。また、上位、下位各10人の比較でも表7で差が0.4にすぎないのに、表8の箇所数では10箇所近くもの差で上位者の方が多いためであるから、上位者の1ヶ所の記述量は少ないということになる。即ち「手がかかり」については「過程」と逆に、その記述の箇所数よりも1ヶ所、1ヶ所でいかに手際よく述べていくかという問題であるといえる。

6. ま と め

一般に文章のわかりやすさの1つの大きな要因としてあげられる1文の長さは確かにこの調査においてもわかりやすさと関係していることが明らかになった。しかし、それは長い文がわかりにくい傾向にあるということであり、必ずしもわかりにくい文が長い文ではない。そして女性の文章のわかりにくさはこのような、形としての文の長さによるものではない。なぜならば女性の文に比して、1文の長さについても、複雑な構造の文のしめる割合についても少ないのである。

一方女性の文章の長さを形成しているのは「まっすぐ進む」というような「過程」の記述であり、しかも単に量のみならず、曲り角ごとのどの場についてもそのような記述をするという箇所数の多さである。確かにどの曲り角でも、まがったあと「まっすぐ進む」「しばらく行く」という言ってみればわかりきった説明をすることは、文章にごたごたとくどいイメージを与えるものであろう。また表1であげたように「すこし」「まっすぐ」「すぐ」という副詞の曖昧さ＝わかりにくさが指適されていれが、これらの語が出てくるのも、ある「地点」等の記述ではなく、「過程」の記述においてであろう。このような意味での融通性のない丁寧さが、かえって女性の文章をわかりにくくしている一因であるとの調査では結論したい。

さてそれでは何故女性の説明の文章はこのようにわかりにくいのか。

「女性は方向音痴である」「論理的でない」という批評は、本調査の文章を見た限りでは領けない。これらの文章では、例えば方向を誤ったものの率が女性に高いことはなかったし、論理的に脈絡の通らぬ文章も男女ともになかったのである。—勿論実際の生活では、男女を問わず道の説明などはうまくできないという人はいるだろうし、それが女性により多いということもあるかもしれない。しかし、それは見知らぬ他人と話をする経験量の差

とか、地理に詳しいか否かなどということによって、まず考えられるべきものであろう。

ただ女性の文章のわかりにくさが「過程」記述における整理のない多弁ぶりにあるのだとすれば、この原因を示唆するのは、一般に女子高校生が男子よりも書くことを苦にせず、長い文章を書く傾向にあるということである。いわゆる作文——読後感想や心中思惟などを書く場合には、女子の方がずっと細かい心の襞まで綴るように思う。ちなみに私の勤務する——本調査を実施した一高校では毎夏に校内読書感想文コンクールを行っているが、過去10年の入賞者数を男女別に比べてみると次のようになる。

表 9

年度 性別	1971	2	3	4	5	6	7	8	9	1980	計	全校生徒数
男	8	9	6	5	5	3	1	5	5	5	52	約250
女	28	19	24	19	19	11	11	16	20	20	187	約440
男/女	0.29	0.47	0.25	0.26	0.26	0.27	0.09	0.31	0.25	0.25	0.28	0.57

この表でみると男子の入賞者の割合がかなり低い。勿論校内的な狭い範囲のものであるし、年度ごとに入賞者数も選考基準も必ずしも一定ではないので断定はできないが、それでも読書の感想という分野では女性の方がすぐれた——ということはわかりやすい文章であることも含め——文章を書いていることは想像に難くない。

このようにこまごまと丁寧に書く性質——習慣が、かえて災いして、内容の取舍選択や要点を伝えることを必要とする説明文においては、簡潔性、能率性をそこなう結果になっているのではないだろうか。

附 記

小論は1980年5月に学習院大学で行われた国語学会春季大会での研究発表をもとに書いたものである。このときの発表題目は、

「文・文章の長さからみた説明文のわかりやすさ——男女差に視点をおいて」というものであった。

このとき樺島忠夫氏に、発表内容が欲ばりすぎて、視点がはっきりしないというご批判をいただいた。確かに説明文の長さとのわかりやすさというこ

ろから見ていった場合、長さはわかりやすさどこまで関係があるのかということもはっきりしていない現況では、さらにその上に男女差をのせることは、研究の視点を曖昧にすることをのがれ得ない。

そこで小論を書くにあたっては、もっとも興味のある男女差に視点をおき、そこからわかりやすさの要素を確かめてゆくことにした。

そうなる次段階では長さのみならず、語のつかい方等、他のわかりやすさの要素についても考えてみなくてはならない。それらは今後の課題となるであろう。

注1. 調査に協力していただいた5人の職業とおよその年齢は次の通りである。

男 高校教員25才 男 公務員29才 女 小学校教員29才
女 主婦30代前半 女 主婦 30代前半

注2. 40名の生徒は同一校の中から無作為に抽出した。この数字には検定を施したところ有意であった。従ってこの学校の生徒全体に関してはこのような傾向があるといえる。但しこれだけの数字から全高校生、全男女差について言及することは勿論できない。ちなみに本校はその卒業生のほとんどが、そのまま一般事務職、現業、販売などの第一線の労働力として就職していく職業高校である。

注3. デール・チャールの公式、フレッシュの公式については、
「文章上達の心理学」安本美典 月刊言語 1978.5
に詳しい。

注4. 「文章心理学入門」新潮文庫 昭44

注5. 「文章工学」一表現の科学一 三省堂 昭42

注6. デールは3000語の基礎語彙表をさだめた。これにない語を「不親和語」という。

注7. 注5に同。但しこの分類の根拠は不明である。

注8. 5人のうち1人でも、ということであると読み手側の能力も問題となってくる。しかし2人ということにすると行きつまり文の絶対数は非常に少なくなる。内容のごく平易な文章なので、ここでは特に読み手の能力を問題としないことにした。

注9. 樺島氏の「つなぎの長い文」とは次のようなものである。(注5に同)

暑中見舞を連日出さねばならぬほどの暑さが続いているが、さる16日の日曜などに、日本中が酷暑の中でひっそりしていたほどである。

本調査での「つなぎの長い文」の典型を次にあげる。

駅をおりてから、まずスーパーマーケットと銀行の間の道に入り、十字路の3つ目に病院があり、そこで左にまがり、銀行の前を通過、レストランがあり、その前道(「前の道」か?)に入り、小学校と公園の間のいちょうの街路樹を通り、右にまがって十字路があり、その本屋さんと文房具店の間の道を行けば市役所にいけます。(男子)

この文章は全体133字1文という長さでありながら男性で4位、全体で5位という高い評価をうけている。

注10. 樺島氏の「構造の複雑な文」文例(注5に同)

督促文は代金の支払い、注文品の発送その他いろいろの義務履行につき、単なる請求文より一層強い意味を持つので、相手方に相当責任のある場合に強硬に書く。

なお、本調査の範囲ではこの例文のような「構造の複雑な文」は存在しない。ここにあげたものは、基本的な形のいわゆる複文がほとんどである。

(都立農林高校)